

甦る熊野古道 **復興編**

2011年の台風被害から約1年。多くの人々の尽力で熊野古道が復旧した。「世界遺産を守りたい」。そんな思いが早期の復旧につながった。

世界遺産を守りたい ボランティア約900人

緑に輝く山々は、まるで何事もなかったかのように、悠々と佇んでいた。沿道には、団体客を乗せたバス、リュック姿の旅行者らの姿。台風12号被害から約1年。世界遺産、熊野古道ににぎわいが戻ってきた。

「全国から来る人のためにも、一日も早く道を通さなくては…。そんなボランティアや県、地元の違いが二つになった結果。世界遺産じゃなかったら、こんなに早く復旧できなかった」。和歌山県世界遺産センターのセンター長、辻林浩さんは話す。



「熊野古道は、それ自体が長い歴史の軌跡。平成の台風被害もその歴史上の出来事」と県世界遺産センター長の辻林さん。

県南部に大きな被害をもたらした台風12号。田辺市から本宮に向かう熊野古道の主要ルート、中辺路では約40カ所に被害があり、5カ所が通行止めとなった。「1年じゃ無理だろう…。土砂に埋もれた道を前に、辻林さんらは言葉を失った。しかし、「何か力

になりたい」「古道を守りたい」というボランティアが続々と現れ、計約900人がかけつけてくれた。ダンパー何杯分もの土砂を15人がかりで撤去した頼もしい団体職員もいた。

「被災して初めて世界遺産という意味の大きさがわかった気がします。今は、『もう道が直ったんですね』『来てよかった』という旅行者の声を聞くのが、何よりうれしい」

古道を守ることは 文化を継承すること

復旧には、世界遺産ゆえの難しさもあった。「熊野古道とはいっても、もともと一本の決まった道が

あったわけではありません。長い時間の中で変遷を経てきました。時には災害もあったでしょう。そうしたドラマの積み重ねこそが古道の歴史なのです」と語る。例えば、迂回ルートを決めるにも、あまり険しすぎてもいけないし、神聖な古道の雰囲気にもそぐわない道も好ましくない。以前に使われていた道などを、地元の人々の話や文献をもとにリサーチし古道にふさわしいかどうかを考慮しながら現地調査する。ルートを選択したら今度は、地権者と通行許可の交渉…。「大切なのは、今回の台風被害もまた、古道の歴史の一部であるという視点。この物語も後世に伝えていかなければ」

現在行われている式水地域周辺の道普請もひとつの歴史である。あえて盛り土の種類を変え、落ち葉もそのまま埋め込む。いずれ落ち葉が炭化し、後世の人が古道の歴史を調べるとき、「平成の台風被害」を読み解く手がかりになる。それは、何百年先、何千年先への「伝言」だ。「それでこそ世界遺産と言えます。世界遺産とは現在進行形で作っていく歴史そのものなんです」。今回の復旧は、古道の歴史の1ページに永久く刻み込まれていくにちがいない。



古い文献や地元の人々の話をもとに新しいルートを決めていく。険しすぎないか、古道にふさわしいかなどをチェックする。



台風被害に伴い、新たに設けた迂回ルート。歩きやすいようヒノキで足場を組んでいる。

「来てよかった。そんな旅行者の声を聞くのが、地元にとって、何よりの励みになる」と辻林さん(中央)。県世界遺産センターの職員とともに。